

「色光」概念の歴史 — 色彩療法史の観点から

山根千明

色彩でも光でもない、色彩を帯びた「色光Farbenlicht」という概念は、古代以来それぞれ心身作用を認められてきた色彩と光を融合した概念として中世に登場し、1920年代には、色彩療法Chromotherapieに不可欠なメディアとして知られていた。色彩療法は、人智学者ルドルフ・シュタイナーをはじめとする神秘主義者を中心に受容・展開されたため、色光にも神秘主義的性格が見出されることが多い。

しかし色光の歴史を繙くと、物理学・生理学・化学・実験心理学を横断して継承された科学的関心が浮かび上がる。つまり、色光の心身作用は、19世紀ドイツにおいて、ゲーテの『色彩論』（1810）と日光治療研究（Döbereiner, 1816）を契機に科学的検討が開始され、1870年代には色光の生体作用が主に細菌学と植物学の分野で実証され、1878年、牧師の息子で内科医のエドウィン・バビットEdwin D. Babbittが、レンズやフィルターで作ったさまざまな色光を用いた実験と、古代・中世の伝承を総合し、色彩療法として基礎づけた。

当時の医学が色彩療法を拒否したため、色光の心身作用は神秘学者を中心に流布する結果となるが、20世紀ドイツにおいて、実験心理学の分野で科学的裏付けがなされ「トーンス理論Tonustheorie」として応用心理学の一種、心理技法Psychotechnikの基礎理論となり、たとえば造形学校バウハウスでは、造形の基礎理論に採用されるに至ったのである。